

山王

卯歳新春号





新春を迎えて

日枝神社氏子崇敬会会長 小池 百合子

令和五年の新年を迎え、新春を寿ぎ謹んでお慶びを申し上げますとともに、日枝大神様の更なるご加護のもと、今年が良き年でありますようご祈念申し上げます。

久々に、街に賑わいが戻りつつあります。明るい兆しを、力強い成長のうねりへと繋げ、持続可能な東京の未来を確かなものにしていきたいと思ひます。

感染症、エネルギー問題、自然災害など、地球規模の出来事が足元の社会経済活動に直結する時代です。都政においても、世界を常に意識しなければ、たちまち国際社会の潮流から取り残されてしまうでしょう。昨年のCOP27では、人類が直面する気候危機の現状と対策の最前線を目の当たりにし、改めて、国家や都市が共に力を合わせて取り組むべきとの思いを強くしました。東京都は、電力を「④減らす」、「①創る」、「①蓄める」のH-T-Tを合言葉に、皆様と力を合わせ、脱炭素化とエネルギーの安定確保を同時に進めていきます。

また、取り巻く脅威から都民の命・暮らしを守り抜く強靱な都市の実現も重要です。折しも、今年は関東大震災の発災から百年の節目を迎えます。都の防災施策を前提条件から見直し進化させた「TOKYO強靱化プロジェクト」を推進力に取組を一層加速していきます。

そして、この安全・安心を基盤に、「人」が思いのままに活躍できる社会を築く。多様な人材が生み出すアイデアやテクノロジーこそ東京が誇る強みです。そこで、これを一つのブランドにして、世界中に売り込んでいきます。その名も「Sustainable High City-Tech Tokyo」。頭文字を取り、「Sushi Tech Tokyo」です。世界中で親しまれる日本の食文化「鮎」のように、国際社会での存在感を発揮していく。二〇二三年は、その出発点となる年です。スタートアップを中心とした国際イベントを開催するなど、挑戦を続ける東京の姿を力強く発信してまいります。

東京が変われば、未来も変わる。希望と活力に溢れる都市への進化を共に推し進めてまいります。最後に、この新しい年の国家の安寧と弥栄、日枝神社のご神徳の昂揚とご社頭のご隆昌、氏子崇敬会の更なるご発展、また皆様のご健勝とご多幸を心からご祈念いたしまして、私の新年にあたりましてのご挨拶とさせていただきます。

令和五年 元日

新春祭典・行事のご案内

一月

一日(日)

午前零時 若水祭

神能「ひとり翁」奉奏

山階彌右衛門師 奉仕

午前七時 歳旦祭

三日(火)

午前八時 元始祭

六日(金)

午後二時 奉納書初展感謝奉告祭

*山王奉書会・記念講演は行いません。

十三日(金)

午前十一時 印章護持祭

十五日(日)

午前九時 月次祭

午前十時十五分 神符焼納祭

二月

三日(金)

午前十一時三十分

節分祭追儺神事

*神事のみ行い、豆まきはいりません。

神宮初詣旅行会・新年互礼会は
感染症対策のため、中止致します。

特別寄稿



参議院議員

山谷えり子

皇紀二千六百八十三年、令和五年が幕開けとなりました。

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

新年を迎えるにあたり、御皇室の弥栄と天下泰平、国土安穩、聖寿無窮、万民豊樂を祈念いたします。

癸卯（みずのと・う）の本年は、これまでの努力が花開き、実りはじめる年と言われています。

円安と資源高、そして物価上昇による家計への影響など不安も長引いておりますが、一日も早く日々の暮らしに希望の光がさす一年となりますよう願っております。

ここ数年、コロナ禍で中止となっていた地域のお祭りやイベントなどが徐々に再開はじめています。各地で行楽を楽しむ家族連れの笑顔を見るだけで、こちらまで幸せな気分にもなります。子供にとっての一

康公の「どうする家康」がスタートします。

広く「山王さん」と人々に親しまれている日枝神社は、家康公入城後、徳川家の守り神として崇敬されたとお社でもあります。

十五代の将軍を輩出し、二百六十五年の時代を築いた徳川家。

戦国三英傑と言われる家康公は思慮深いイメージがあり、残したところそんなに難しいことではない。難しいのはその前の熟慮である。」と述べています。

また、『大事を成し遂げようとするには本筋以外のことはすべて荒立てず、なるべく穏便にすますようにせよ。』と、事前準備や部下を育てる情の大切さを人質として過ごした期間が長かった自身の幼少期の体験の中から否応なしに体得していたことが窺えます。

六十年前の癸卯の昭和三十八年、当時、中学一年生だった私は福井県で長閑な少女期を過ごしていました。が、突然父の山谷親平が十一月の衆議院選挙に立候補し、落選。夜中の開票得票を聞き続けた私は、悔しくて闇の中で枕が涙で黒々と濡れる夜を過ごしました。この日で父は失

業、家をなくし、多額の借金を背負って、母と共に東京へ仕事と住む場所を探しに出かけました。来る日も来る日もボタ雪が降り続く中、両親のいないガランとした家で小学四年の弟の面倒をみながら暫く暮らしました。

ある日、両親から家と仕事が見つかったので東京に出てくるよう連絡があり、弟と二人で指定された夜汽車で上京、東京に着くと明るく青い空と両親が待っていてくれました。

その時に「ああ、家族って、一緒にいられるだけで何と幸せなことだろう」と強く心に刻まれたことが、政治家となった私の活動の原点でもあるといえます。

地域、職場、家族が希薄化している現在、人々の心身が孤立しないよう優しい社会を創っていくのが私の使命でもあります。

今春には、いよいよ統一地方選が行われます。

情熱をもった良識ある地方議員が皆様の手によって議会へ送り出されることを楽しみにしています。

結びにあたり、国家の安寧と皆様の御健康と御多幸を心より祈念し、新年のご挨拶とさせていただきます。

山王祭

—日本三大祭—

川越祭礼研究家

水戸 一斎

(監修 山瀬一男)

祭礼の獅子

日枝神社では、二年に一度山王御祭礼が行われ、神輿を中心とする行列が氏子域を巡幸します。新型コロナウイルスの影響でここ数年お目にかかれていませんが、絵巻物を抜け出したかのような総勢五百名に及ぶ行列は見事なものです。

この行列には二頭の獅子が含まれています(画像1)。御祭礼に限らず、神社のまつりには獅子頭がよく見られます。川越まつりでも、行列の先頭に獅子がいます。悪霊退散のためと考えられているこの「獅子」は、いったいどこから来たのでしょうか。今回は長い歴史の中で獅子がたどった道をご紹介します。

山王御祭礼の獅子

江戸時代のはじめから、祭礼の行列に獅子はつきものでした。寛永十二年(一六三五)に三代將軍徳川家光公が御祭礼を大祭にしたときも、異界の雰囲気を満たしたこの「生き物」は祭礼に欠かせない存在として行列に加わっていました。

この獅子頭は、家光公幼少期の手習いの反古で作られたと言われています。行列を見物する人々は、獅子が目の前を通り過ぎると土下座して見送りました。

獅子頭を運ぶ役は大伝馬町と南伝馬町が受け持ちました。これは「国役」と言って、幕府から課役として命じられたものでした。真夏の江戸の町を一日中歩き通すのは過酷なことでしたが、町にとっては大きな名

誉でもありました。

江戸時代の半ばを過ぎると、町でお抱えの鳶たちが獅子頭を担ぐようになりました。両町からそれぞれ十二名ずつ参加し、大伝馬町は雲に稲妻、南伝馬町は雲龍を描いた揃いの半纏を着ていました。

江戸っ子を絵に描いたような鳶は、獅子を操らせても天下一品でした。

將軍の上覧所までやって来ると、狂ったように激しい舞いを見せました。これが行列最大の見どころとなっていたほどこです。

それ以外のときは胴の幕をたたみ、二頭の獅子を二人が一人ずつ肩に担ぎ、ほかの鳶とともに木遣りを唄って歩きました。「木遣り」とは鳶職の労働歌のことですが、本来は巨岩や大木など神聖なものを運ぶときに唄うものでした。獅子も同様に神聖なものと考えられていたのです。

この二頭の獅子は、現在でも日枝神社の宝物殿で見ることが出来ます(画像2)。民衆が土下座した獅子頭を、私たちは間近に接することが出来るのです。

祇園祭の獅子

山王御祭礼は、京都の祇園祭の影響を強く受けています。祇園御霊会



【画像2】日枝神社宝物殿の獅子



【画像1】山王御祭礼の獅子

と呼ばれたこの祭礼は、御祭礼が大祭となったころにはすでに八百年近い歴史を誇り、国内すべてのまつりの頂点に君臨していました。御祭礼は御霊会からかなりの部分を取り入れたのです。

その行列の中に獅子がいました。祭礼の道筋を清めるといふ獅子の役割は、そっくりそのまま御祭礼に引き継がれたように見えます。ただ、その意味合いは若干異なっていました。御霊会は神社のまつりではなかったのです。

現代の祇園祭を執り行っている八坂神社は、江戸時代には寺院の側面を併せ持つ「祇園社」と呼ばれていました。「祇園」とは釈迦が説法を行った「祇園精舎」に由来し、祇園社に祀られている牛頭天王は祇園精舎の守護神です。

平安時代の祇園社は比叡山延暦寺の末社でした。御霊会は寺院としての祇園社のまつりだったのです。獅子は仏教思想の「穢れ」を取り除くため、行列に参加していました。

祇園社の獅子に特徴的なことは、担ぎ手が寺院に従属せず、独立した專業者集団を形成していたことです。彼らは「座」を設け、祇園社からの要請に応じて祭礼の獅子を演じました。この点も、鳶が獅子を担い

だ御祭礼とは似て非なるところです。

さらに御霊会の獅子がその他の獅子と決定的に違うところは、祭礼のほかに祇園社から駆り出されることがあったことです。それは「強訴」です。

平安時代から、延暦寺は朝廷に対する示威行為を繰り返していました。これがすなわち強訴で、延暦寺の末社である祇園社は強訴への協力を強いられ、前線基地の役割を担わされてきました。

延暦寺で強訴の実施が決定されると、山法師たちは祇園社に集結し、比叡山の守護神である近江坂本の日吉社の神輿と合流して、京の町なかへなだれ込みました。獅子はその際の神輿の先払いを務めていたのです。平和な印象の強い獅子ですが、こんな物騒な過去があったこともまぎれもない事実ですので、歴史の一齣として記録にとどめたいと思います。

伎楽の獅子

獅子は仏教とともに朝鮮半島からやって来ました。仏教の導入に熱心だった聖徳太子が、仏を供養する樂として伎楽を奨励したのです。その中に獅子がいました。

伎楽は式場へ向かう行列（これを「行道」といいます）と、式場での演技のふたつから成り立っていました。獅子は行道の先頭を歩き、後ろに笛や太鼓が従いました。式場へ到着すると、獅子は舞台の隅に伏して樂人を迎えました。

獅子の役は、伎楽の專業者集団である樂戸が務めました。聖徳太子以来の伝統で、課役免除の特権を付与された樂戸が伎楽の演奏を任されていたのです。大宝元年（七〇二）に宮廷の音楽をつかさどる「雅楽寮」が創設されたときも、伎楽の伝習生は樂戸から採用されました。

伎楽が最も盛り上がったのは、東大寺の大仏開眼供養のときです。天平勝宝四年

（七五二）、仏教の力で世の中を平和にしたいという聖武天皇の発願により大仏がつくられ、その御霊入れの儀式が行われました。

このときの伎楽も雅楽寮が担当しましたので、行道の獅子は樂戸が務めました。開眼供養が無事に終わると、一万人

の参列者が見守るなか、獅子が行列を先導しました。

このとき使われた獅子頭が、現在も正倉院に保管されています（画像3）。千三百年も昔の、これほど有名な儀式で使われた獅子がいまだに残っているとは、驚き以外の何ものでもありません。

平安時代になると、中国から輸入された唐樂をはじめ、さまざまな音楽が伎楽と融合し、日本人の好みに編成し直され、洗練された樂として宮廷や寺院で盛んに演奏されるようになりました。

清少納言の『枕草子』の中にも、天皇の行幸や寺院の法要の際に獅子の舞う様子が描かれています。貴族



【画像3】東大寺大仏開眼供養の獅子（出典：正倉院宝物）

たちの生活に、獅子はしっかりと根付いていました。

この時期、寺院の法要が体系化され、法要の合間に歌舞音曲が織り込まれ、それらが混然一体となって荘厳な舞台が繰り広げられるようになりました。獅子は場を清めるとともに、法要の効果を高める霊獣として欠かせない存在となりました。このような素地があつて、後の祇園御霊会が形成されていったのです。

渡来前の獅子

獅子の起源をさらにさかのぼると、遠くインドに行き着きます。獅子という名も、インドの獅子「シンハ」から来ていると言われています。

インドでも行道が行われていました。もともと、インドで「行道」と言う場合は、本尊や堂塔の周囲をぐるぐる回ることを意味し、それとは別に仏像などを輿や車に乗せて行列を組む「行像」がありました。日本ではその二つが混同され、行像の行列も行道と呼ばれていたのです。

インドの行像は釈迦の降誕会（こうたんえ）。日本でいう「花まつり」のときに行われました。その先頭に獅子がいました。行列の行く手を清めるためと言われていますが、偉大な仏教の力を示すため、「百獣の王」

である獅子に先導させたのかもしれない。

インド初の統一王朝を作り上げたアショーカ王は、王権の象徴として獅子を用いました。王の行幸を記念した有名な「アショーカの尖塔」の柱頭にも、四頭の獅子が彫刻されています（画像4）。

仏教を保護・奨励したアショーカ王は、石柱や岩に碑文を刻み、仏法に基づく統治を掲げました。石柱の柱頭には獅子などの彫像を飾り、仏教の教えが王の権力と同じく絶対的なものであることを印象付けました。仏教と獅子の関係はここから生まれたのです。

一方、獅子を王権の象徴とするとは、古代ギリシャの影響であると考えられています。紀元前四世紀にアレキサンダー大王がアジアに遠征し、インド北西部まで到達したことが、王朝成立のきっかけとなっているからです。

アレキサンダー大王は自らをギリシャ神話の英雄ヘラクレスになぞらえ、銀貨にも獅子の毛皮をまottたヘラクレスの横顔を描かせました。勇猛な獅子は王の偉大さを表し、大王はその姿に自身を重ね合わせていたのです。

王権と獅子の結びつき自体は、そ

れよりもはるか昔、数千年前のメソポタミアまでさかのぼることができまます。アッシリアという国では、獅子をも超越する存在の王だけが獅子狩りすることができました。悠久の時を超えて目の前にいる獅子を眺めていると、深い感慨を覚えずにはいられません。

時代は下り、インドの行像は中国に伝来しました。獅子そのものは紀元前からシルクロード経由で中国にもたらされていましたが、五世紀に中国の北魏という国が中央アジアを平定したことから、東西交流が盛んに行われるようになり、さまざまな物品とともに仏教が中国に移入されたのです。

北魏でも降誕会の行像が行われていました。行像と行道が習合して行道と呼ばれるようになったのもこのころです。行道の先頭には、もちろん獅子がいました。

仏教文化はやがて朝鮮半島に及び、七世紀には東の果ての日本にまで達しました。仏の功德を体感してもらおうと、聖徳太子は伎楽の伝習に力を入れました。大陸で見られたのと同じ降誕会の行道が日本でも行われ、笛や太鼓に合わせて獅子が行列の前を歩きました。

ライオンが一頭も生息していなかった東アジアで、行列の先頭に獅子が見られるようになったのは、このような歴史があるからです。イン



【画像4】アショーカの尖塔（写真提供：アフロ）

ド発祥の行像の獅子が、仏教を媒介として、千年かけて東アジア共通の「守り神」となったのです。このような存在はほかにありません。

吉原の獅子

ここからは余談となります。山王御祭礼の獅子は、安永年間（一七七〇年代）に思わぬところへ飛び火しま



【画像5】『明月余情』の獅子（出典：国立国会図書館デジタルコレクション）

した。遊郭の吉原で行われたまつりの行列に、突如獅子が出現したのです。

吉原では秋の客寄せの手段として何度かまつりが開催されましたが、目玉となる出し物がなかったため集客力に欠け、長続きしませんでした。そこで御祭礼をまねた祭礼行列が企画され、獅子舞の登場となったのです。

担ぎ手は「禿」と呼ばれる遊女の見習いから選ばれました。火消しの鳶が使う細身の弓張提灯を携え、髪を男鬚に結って行列の先頭を歩きました。

ただ形をまねただけでなく、御祭礼の鳶のごとく歩きながら木遣りを唄いました。それが宝塚歌劇団さながらの色香を放つことになり、「これを見ぬ人は人間の数に入らぬ」と言われるほど評判になりました。

なかでも「いち」という禿は、およそ

四十年後に書かれた『北里見聞録』でも「天然の妙声」ともてはやされ、『明月余情』という絵草子にもその姿が描かれました（画像5）。

担ぎ手は後年禿から芸者になりましたが、獅子舞は明治時代まで途切れることなく続きました。さらに獅子舞の警固役として、御祭礼に見られる裁付袴の鉄棒曳きが獅子の前を歩くようになりました。いつしかそれは「手古舞」と呼ばれるようになり、現代でも関東各地でまつりの花形となっています。

永遠の獅子

時代とともに、獅子はその性格を著しく変えました。現代の山王御祭礼や川越まつりは氏子が獅子頭を運んでいます。かつては楽戸や獅子座といった専門業者集団が演じていたこともあり、威勢の良い鳶職が舞い踊ったこともあり、はたまた芸者が参入したこともあり、実に様々な様相を呈してきました。

それでも、獅子は常に私たちのそばにいました。そして古今東西さまざまな人に親しまれてきました。これから獅子は祭礼の中に生き続け、私たちを楽しませてくれるでしょう。獅子にはその期待に応えられるだけの懐の深さがあります。



護みて新年の
御祝詞を申し上げます

頌 春
令和五癸卯歳

日枝神社

代表役員	宮西修治
宮司	
責任役員	中澤彦七
同	福原義春
同	大澤忠政
同	澤田晴子
同	杉山博孝
同	泉由紀子
同	細田真
責任役員	大塚正行
権宮司	



謹

賀

新

年

順 不 同 敬 称 略

			マネックス証券(株) 代表取締役 会長 松本 大			八重洲ライフ(株)・八重洲ゴルフライフ 代表取締役 社長 松本信義			(株)ぬ利彦 代表取締役 社長 中澤彦七		
(株)ニユー・オータニ 代表取締役 社長 大谷和彦			(株)永田町 天竹 代表取締役 萩原弘樹			(株)ザ・キャピトルホテル東急 総支配人 志村恒治			山の茶屋 遠藤恒夫		
(株)ジー・コーポレーション 代表取締役 堀切健司			(株)千修 代表取締役 社長 下谷友康			(株)伊勢半本店 代表取締役 社長 澤田晴子			山王熱供給(株) 代表取締役 社長 津曲荒太		
(株)帝国ホテル 取締役社長 定保英弥			(株)朝日写真ニュース社 代表取締役 社長 阪田裕一			(株)伊勢半本店 代表取締役 社長 澤田晴子			山王熱供給(株) 代表取締役 社長 津曲荒太		
(株)東宝(株) 代表取締役 社長 松岡宏泰			(株)高島屋 代表取締役 専務 亀岡恒方			(株)キョウエイアドインターナショナル 代表取締役 社長 廣瀬勝巳			有ナリタ美容室 代表取締役 成田弘子		
(株)川崎定徳(株) 代表取締役 川崎眞次郎			(株)栄太樓總本舗 代表取締役 社長 細田 眞			田中貴金属工業(株) 代表取締役 社長 田中浩一朗			日本料理ゆかり 野永喜一郎		
日本橋吉野鮎本店 吉野正敏			(株)八重洲・日本橋 代表取締役 社長 野永喜一郎			(株)東京會館 取締役社長 渡辺訓章			泉吉(株) 代表取締役 岸本昌子		
(株)ジー・コーポレーション 代表取締役 堀切健司			(株)東宝(株) 代表取締役 社長 松岡宏泰			(株)キョウエイアドインターナショナル 代表取締役 社長 廣瀬勝巳			有ナリタ美容室 代表取締役 成田弘子		
(株)ニユー・オータニ 代表取締役 社長 大谷和彦			(株)朝日写真ニュース社 代表取締役 社長 阪田裕一			(株)伊勢半本店 代表取締役 社長 澤田晴子			山王熱供給(株) 代表取締役 社長 津曲荒太		
(株)永田町 天竹 代表取締役 萩原弘樹			(株)千修 代表取締役 社長 下谷友康			(株)伊勢半本店 代表取締役 社長 澤田晴子			山の茶屋 遠藤恒夫		
(株)ザ・キャピトルホテル東急 総支配人 志村恒治			(株)アルファビデオ 代表取締役 青山朋孝			(株)日枝神社四葉会 代表取締役 三番町 田中康博			(株)マネックス証券(株) 代表取締役 会長 松本 大		
(株)八重洲ライフ(株)・八重洲ゴルフライフ 代表取締役 社長 松本信義			(株)ぬ利彦 代表取締役 社長 中澤彦七								

大総代 遠藤恒夫											
関口弥寿雄											
根岸 進											
田中康博											
清水昭治											
岡村好貴											
松岡宏泰											
野永喜一郎											
今野克彦											
富田正一											
三枝 亮											
小坂 敬											
北見芳夫											
木村暖子											
安倍洋子											
羽田宇男											
亀岡恒方											
日枝神社											
令和五癸卯歳											
頌 春											

順不同敬称略

頌 春
令和五癸卯歲

日枝神社

宮司宮西修治

権宮司大塚正行

補 宜 高 原 聖 司

補
宜
鎌
田
周
作

権禰宜土田幸大

同
片山
徹

同
内田博之

同
杉山正吉史

同
手塚和記

同
松橋裕晃

同
高野大樹

同
左
籛
右
貴

中島大二郎

同
千葉充彦

同
多
善
多
氣



令和四年 回顧

一月	元旦 若水祭 歳旦祭 國學院大學佐柳正三理事長参拝 小池百合子氏子崇敬会長参拝
二日	元始祭
三日	第五十八回奉納書初展感謝奉告祭
六日	印章護持祭
十三日	神符焼納祭
十五日	神社本庁鷹司統理参拝
十七日	神社本庁田中総長 吉川副総長参拝
二十一日	節分祭
二月	紀元祭
三日	祈年祭
十一日	天長祭
十七日	春季皇霊祭遙拝
三月	
二十一日	



昭和祭



元始祭



若水祭

四月	末社山王稻荷神社例祭 昭和祭 御神田田植祭 於千葉県香取市
二十三日	
二十九日	
六月	
七日	山王まつり
～	
十七日	八坂神社例祭
七日	境内茶園並狭山新茶奉納奉告祭
十二日	表千家元献茶式
十三日	献灯祭
十五日	例祭
十六日	煎茶礼道日泉流献茶式
	山王嘉祥祭
十七日	裏千家元献茶式
三十日	大祓並鎮火祭

九月	三 日	御神田拔穂祭 於千葉県香取市
	二十三日	秋季皇霊祭遙拝 第五十回山王祖霊祭
十月	三 日	星岡会（旧職員会）
	十七日	神嘗祭遙拝
十一月	三 日	明治祭
	十日	第七回責任役員会 第七回神社総代会（大総代会） 責任役員大総代会合同会
	二十三日	新嘗祭
十二月	一 日	大麻神札頒布始奉告
	三十一日	大祓並鎮火祭 除夜祭



大祓 並 鎮火祭



八坂神社例祭



新嘗祭

新型コロナウイルス感染症拡大防止の為、各祭典は神職及び関係各位で執り行い、左記の祭典・行事を中止した。

- ・ 新年互例会
- ・ 節分祭豆撒き
- ・ 神幸祭
- ・ 稚児行列
- ・ 緑蔭朝詣りとラジオ体操の集い
- ・ 箸感謝祭
- ・ 中秋管絃祭
- ・ 敬老祭
- ・ 武蔵野御陵清掃奉仕
- ・ 責任役員大総代会関係団体代表等合同納会

又、第五回 第六回責任役員会、大総代会並びに評議員会は書面審議とした。

御田植祭の早乙女と聖少女

武蔵大学教授 福原敏男

稲作の祭りは、春の豊作祈願の御田植祭と、秋の収穫感謝の新嘗祭（にいなめさい）（日枝神社など）に代表される。各地の御田植祭は①年頭の予祝行事（松などの葉を早苗に、社殿内や前庭を田に見立てる田植の模擬）と②神田への実際の田植に大別される。

平安時代には、都の貴族たちが近在の鄙びた田植を賞翫する「田植御覧」が行われた一方、畿内の古社では神田において田植を華やかに祭礼化する②が成立していった。

京都市西京区松尾^{まつのお}大社の御田^{おんだ}祭もその一つであるが―実際の田植よりもかなり遅く、旧暦六月十三日から二十三日に催された（現七月第三日曜日）。

同祭の初見は、嘉禄三年（一二二七）の「官宣旨案」（東寺百合文書）に載る「御田代^{みたしろ}植女之敷設」とされるが、実際はさらに遡るであろう。早乙女を「植女」と称しており、中世には

猿楽・田楽や笛・鼓・太鼓に囃されつつ、植女による儀礼的な田植が行われものと思われる。

中世後期の「松尾大神宮御田植女注文」（松尾大社蔵）によると、御田代祭には嵯峨郷など十カ村より、計十五人の植女が参加している。

図1は万治二年（一六五九）に写された「松尾社三箇大神図」の「御田代神事」（紙本淡彩、松尾大社蔵）であるが、十一人の早乙女による往時の景観であろう。笛・小鼓・太太鼓の楽人に先導される植女は模様のある笠を被り、両手に早苗を持って拝殿の周りを左回りに歩く。

その後、神田における田植か、早苗をその場（祭場）に投げて田植を模倣したのであろう。

いずれにしろ、素足の早乙女が両手に早苗を持って拝殿を回る姿は、後の少女による肩乗り儀礼への過渡期と思われる。

一方、いくつかの近世松尾社年中行事次第（松尾大社史料集 文書・典籍編）所載）によれば、現在に継承される以下の儀礼となった。

植女が「清浄」な少女に変わり、下津林・上山田（現在の嵐山）・惣（総）市（現在の松尾）の三カ村から三人が奉仕するようになった。三人は、紗を張った「かいばり」（うちかけ、現在は「長千早」を着て、

金銀で飾られた花笠を被り、紅白縮緬の襷を掛け、額には葵形の白粉をつけ、髪を垂らして（下髪）花櫛を挿し、元結を水引で結ぶ。

各植女は壮夫一人と腰元二人（介添え）を従えて本殿の祭儀に参列し、早苗を受けて前庭に出、両手に持つて壮夫の肩に乗り、素袍二人・鍬持ち二人とともに拝殿を左回りに三周する。



図1 万治2年(1659)写「御田代神事」(紙本淡彩、松尾大社蔵)



図2 「松尾お田植」(紙本著色、国際日本文化研究センター蔵)

その後、神主が苗を廻廊から田に見立てた庭に投げると、参拝者は競い取って持ち帰り、田の虫除けにしたと伝えられる。

図2の「松尾お田植」(紙本著色、

国際日本文化研究センター蔵)は、京都の画家、中島莊陽（そうよう）が百年程前に描いた「都年中行事画帖」の一図である。右の建物が拝殿であり、割竹二人と桑杖持ちも詳細に描かれている。

るが、かつての田植の「鋤」が普通の「桑」になったものと思われる。

江馬努による同絵の解説(国際日本文化研究センターHP)によると、当時は明治初頭の改暦以来の七月二十三日であり、前述の三地区より各々十歳程の采女と腰元二人が奉仕した。

頭に牡丹・桜・菊などの造花を飾った紗張の笠を被り(頂きには三人とも牡丹)、笛・太鼓・鼓の能囃子が拝殿で奏され、その後に神事が行われた。

さて現在、京都市無形民俗文化財の同祭は、田の虫除けと豊作を祈って行なわれている。二月の祈年祭に献上された粃種を、神饌所裏の苗代にまいて早苗を育てる。

前述の三地区から植女が選ばれ、祭りの一週間前に家族とともに松尾大社に参り、「宣状」が授与される。祭り当日の拝殿には氏子より奉納された蔬菜が供えられ、植女は図2のように一男性の肩に座らず、彼の首から吊された白布「力紐」に直立する姿勢がよいとされる。

図2では三人とも十歳程であるが、現在は二・三歳ずつ異なり、三少女は稲の三品種を表すとされる。

すなわち、早稲の下津林(小学校五・六年生)、中稲（なかく）の松尾(同三・四年生)、晩稲（おく）の嵐山(幼稚園年長から小学校一・二年生)の順に拝殿を三周する。

以上のように、中世の御田植祭には実際の田植が、中世末から近世初頭には拝殿周回後に田植か、その模擬が行われ、ともに裸足の早乙女が田植装束で演じたのである。

近世のある時期少女に代わった植女は一肩車される祇園祭長刀鉾の稚児のように、着飾って肩に乗って周回するようになった。

以来、清浄なる植女の神聖視が進み、図2の早苗を持った両腕を水平に保ち、直立して地面から浮いて進む神人形のような姿が演出されていった。その外観のみならず、稲の品種を体現する少女と信仰されている、ますます神々しさを感じさせるようになったのである。

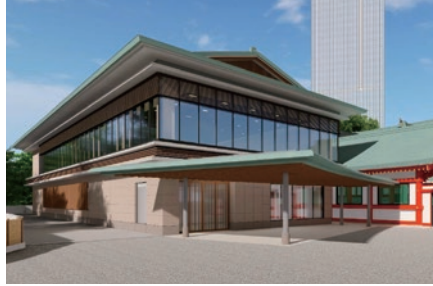
【参考文献】

- 尾崎俊廣「松尾大社の御田祭」(儀礼文化学会編集・発行『儀礼文化』四〇号、二〇〇九年)
- 山路興造「松尾大社の御田植祭」(京都府教育委員会編集『京都の田遊び調査報告書』大文字書林、一九七九年)

日枝神社参集殿地鎮祭

令和四年十一月二十一日(月)に日枝神社参集殿の地鎮祭を執り行いました。

竣工は令和七年の四月を予定しています。



参集殿完成予想図

日枝神社家庭暦上梓

「令和五癸卯年日枝神社家庭暦」

境内授与所にて二百円の初穂料で頒布しております。



救出救助訓練 麴町警察署

令和四年十一月二十二日(火)二十五日(金)に日枝神社参集殿解体現場において麴町警察署による救出救助訓練を行いました。



御神米づくり 抜穂祭



令和4年9月3日(土)千葉県香取市の御神田において抜穂祭を執り行いました。今回も感染症対策の為、神職及び関係者のみでの御奉仕となりました。

収穫された新穀は11月23日(水)に斎行された新嘗祭でお供えされました。

山王台通信

就任

麴町地区 大総代 根岸 進殿

麴町三丁目町会長
令和四年十一月十日付

有楽町・内幸町地区 大総代 松岡宏泰殿
東宝株式会社
令和四年十一月十日付

神社本庁辞令

権禰宜 榎本圭佑

東京都板橋区天祖神社権禰宜に転任

令和四年七月一日付

〈通巻百四十一号〉

発行 令和五年一月一日
編集 日枝神社社務所

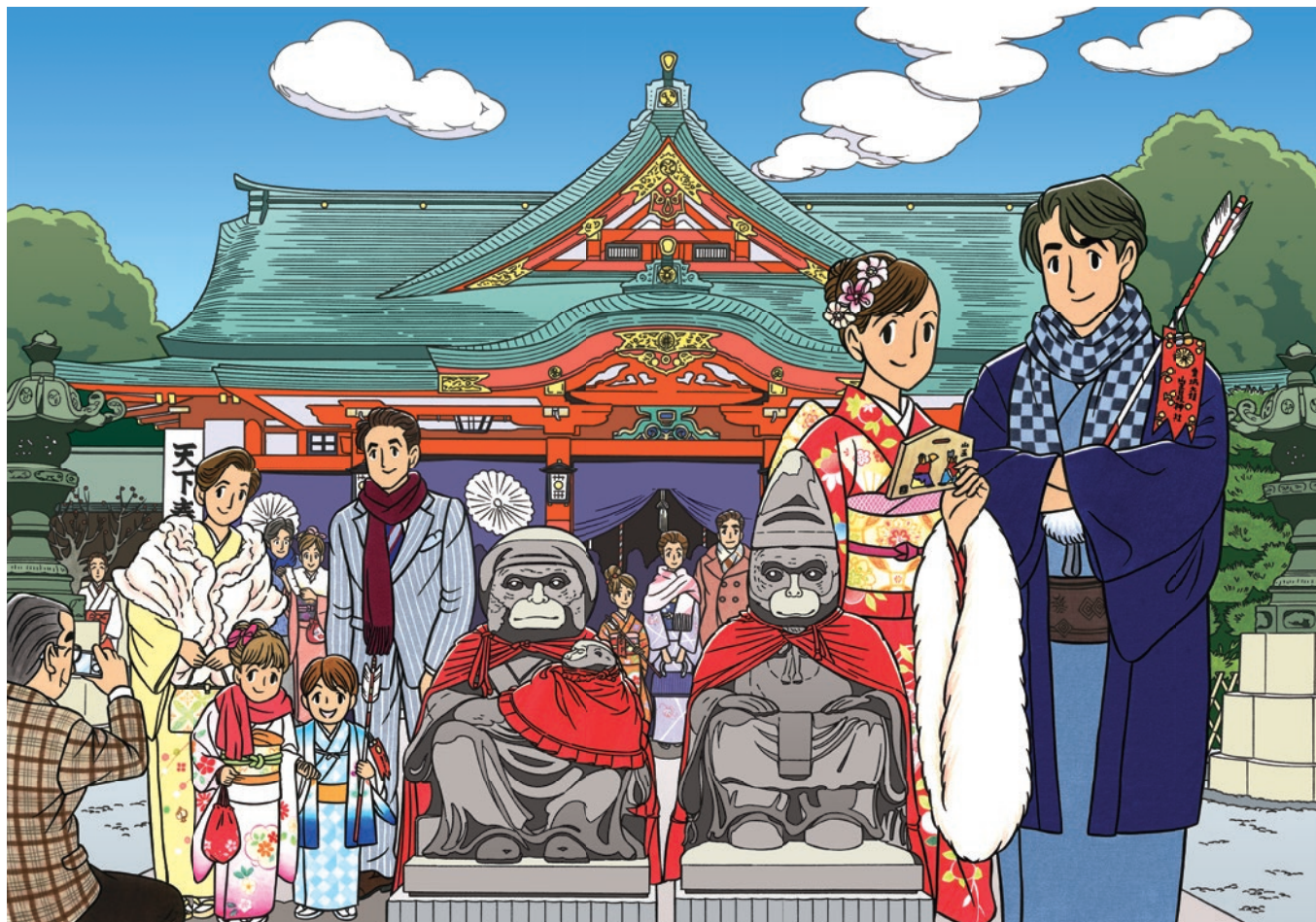
東京都千代田区永田町二丁目十番五号

(郵便番号 一〇〇一〇一四)

TEL 〇三―三五八一―二四七(代表)

FAX 〇三―三五八一―二〇七七

http://www.hiejinja.net/



©わたせいぞう

令和5年厄年表（数え年）

男の厄年

前 厄	本 厄	後 厄
平成12年生 24歳 たつ	平成11年生 25歳 う(うさぎ)	平成10年生 26歳 とら
昭和58年生 41歳 ゐ(いのしし)	昭和57年生 42歳 いぬ	昭和56年生 43歳 とり
昭和39年生 60歳 たつ	昭和38年生 61歳 う(うさぎ)	昭和37年生 62歳 とら

女の厄年

前 厄	本 厄	後 厄
平成18年生 18歳 いぬ	平成17年生 19歳 とり	平成16年生 20歳 さる
平成4年生 32歳 さる	平成3年生 33歳 ひつじ	平成2年生 34歳 うま
昭和63年生 36歳 たつ	昭和62年生 37歳 う(うさぎ)	昭和61年生 38歳 とら

東京都千代田区永田町2丁目10番5号

TEL. 03-3502-2205

FAX. 03-3502-8948

<http://www.hieakasaka.net/>



日枝神社
結婚式場

日枝 あかさか